資料６

文化審議会・文化政策部会ヒアリング用資料

氏名：平田オリザ
団体の名称：劇作家・演出家

Ｑ１）これまでの活動内容を御記載ください。

震災以前からも、ＪＣＤＮ（ｼﾞｬﾊﾟﾝ・ｺﾝﾃﾝﾎﾟﾗﾘｰ・ﾀﾞﾝｽ・ﾈｯﾄﾜｰｸ）等と連携して、演劇を通じた高校生の活動を支援してきており、関係者によるネットワークを幅広く構築してきた。震災後は、特に、文科省の復興教育支援事業を通じて、学校における演劇を通じた復興支援のお手伝いを進めてきたところ。特に、八戸東高校やいわき総合高校への支援は、約１０年以上に亘るものであり、震災後の活動もその延長上にある。昨年には、教員対象のワークショップ（１２校）も実施しており、活動への理解が教員にも広がってきている。

Ｑ２）これまでの活動で課題となった点や、成果であるとお考えの点を御記載ください。

どこでもそうであるが受け皿が弱い。教育界は、文化活動への理解が一般的に低いように思える。教育委員会の示す教育の方針は、例えば「グローバル人材の育成」というようなものが多いが、「東北の復興のために地元に有用な人材をどう育成するか」という視点がないように思える。「地元に有用な人材」を育成するために文化活動から産まれる創造性といったものの果たす役割は大きい。

Ｑ３）今後の活動予定や展望を御記載ください。

今後とも、引き続き、高校生を中心に演劇を通じた復興を支援していくこととしたいが、地元で文化の力を生み出す拠点がないことが問題である。このため次のことを提言したい。

① 文化芸術による東北復興方針を策定する（５年～１０年の期間の方針とする。）。
② 上記方針のなかに、「東北アーツカウンシル」の設置と「国立文化施設」の設置を盛り込む。

Ｑ４）そのほか特筆すべきことがあれば、御記載ください。

子どもたちの育成について、地元に定着する教育が大切である。東北は東京に人材を送る役割を果たすという時代は終わっている。文化芸術の力で地元を復興し、それを支える人材の育成をするために、地元に、学校卒業者を止まらせるような視点に立つ教育が大切である。このためには、教育委員会や学校が「文化芸術・地元定着」に配慮した教育活動を行うことが求められるし、文化・芸術・観光等を専門とする大学の整備ということも求められている。

文化政策部会・東日本大震災集中ヒアリング（平田オリザ氏）の主な意見

平田オリザ氏からのヒアリングにおける主な意見

○震災以前からも、ＪＣＤＮ（ｼﾞｬﾊﾟﾝ・ｺﾝﾃﾝﾎﾟﾗﾘｰ・ﾀﾞﾝｽ・ﾈｯﾄﾜｰｸ）等と連携して、演劇を通じた高校生の活動を支援してきており、関係者によるネットワークを幅広く構築してきた。震災後は、特に、文科省の復興教育支援事業を通じて、学校における演劇を通じた復興支援のお手伝いを進めてきたところ。

○教育界は、文化活動への理解が一般的に低いように思える。教育委員会の示す教育の方針は、例えば「グローバル人材の育成」というようなものが多いが、「東北の復興のために地元に有用な人材をどう育成するか」という視点がないように思える。「地元に有用な人材」を育成するために文化活動から産まれる創造性といったものの果たす役割は大きい。

○今後とも、引き続き、高校生を中心に演劇を通じた復興を支援していくこととしたいが、地元で文化の力を生み出す拠点がないことが問題である。このため次のことを提言したい。

① 文化芸術による東北復興方針を策定する（５年～１０年の期間の方針とする。）。

② 上記方針のなかに、「東北アーツカウンシル」の設置と「国立文化施設」の設置を盛り込む。

意見交換における主な意見

○ご提案の「東北アーツカウンシル」は具体的にどのようなイメージか。（相馬委員）

○「東北アーツカウンシル」は、文化人や芸術家が東北に集まる拠点とし、政府の文化芸術関係予算や、様々な方からの寄附の受け皿とするイメージである。また、東京と東北を有機的につなぐ拠点（プラットホーム）とすることが考えられる。震災後も、政府予算について、東北全体を文化芸術で見渡して受けとるような組織があれば良かった。（平田氏）

○教育の果たす役割も大きいのではないか。東北地方は、山形県以外は、地元に芸術系の大学もなく、高校生などが近くにモデルとなる大人を見いだせない。高校と大学をつなぐ連携拠点がない。このような状況で芸術文化の活動をどう広げていくかが課題である。（相馬委員）

○子どもたちの教育については、子どもが将来地元に定着することを目指すのが大切である。「東北は東京に人材を送る役割を果たす地域だ」という時代は終わっている。文化芸術の力で地元を復興し、それを支える人材の育成をするために、地元に、学校卒業者を止まらせるような視点に立つ教育が大切である。このためには、教育委員会や学校が「文化芸術・地元定着」に配慮した教育活動を行うことが求められるし、文化・芸術・観光等を専門とする大学の整備ということも求められているのではないか。（平田氏）

以　上

職業芸術家は一度亡びねばならぬ
誰人もみな芸術家たる感受をなせ
個性の優れる方面に於て各々止むなき表現をなせ
然もめいめいそのときどきの芸術家である

一九二六年、宮沢賢治は花巻に羅須地人協会を設立し、昼は農作業、夜は農民にエスペラント語や芸術について教え語る生活に入った。先に掲げた一文は、その際の講義の題材として書かれた『農民芸術概論綱要』の一節である。賢治はいったい、何を訴えたかったのか。私には、これは単なる農民の情操教育のためのマニフェストだったとは思えない。

被災地の自立、持続可能な地域再生が叫ばれている。被災三県、それぞれに再生の道は違ってきているが、たとえば岩手三陸地区で言えば、農業・漁業の高度化がその鍵となることは間違いないだろう。

第一次産業の高度化とは何か？　話を簡素化してみよう。

三陸沖は世界最高峰の漁場の一つとされ、高級な魚介類が豊富にとれる。たとえば、ここで捕れたアワビを、漁協を通じて一個千円で出荷していたとする。それが回りまわって、築地の料亭で美しい器に盛られて、一万円で供される。

さて、これを、三陸の地元で、観光などとも結びつけて、少しおしゃれな器に盛って、あるいはフレンチやイタリアンの食材として新しいメニューを開発して、三千円、四千円で売ることは、さして夢物語ではないだろう。そうすれば地元に雇用が生まれ、そこから、さらなる消費が生じる。

千円で東京向けに出荷すること、三千円で地元で消費をすること、この二千円の違いが「付加価値」である。付加価値とは何か。それはとりもなおさず、「人との違

い」ということだろう。漁協に一律いくらではなく、そこに消費の多様性を見いだし、付加価値をつけていく。付加価値をつけることを前提にして、すべての生産体制を柔軟に見直していく。これを称して、第一産業の「高度化」と呼ぶ。そんなことはみんな分かっている。分かっているけれども、それができないのはなぜだろう。農協や漁協がいけないのか。私はそうではないと感じる。

付加価値を生み出すだけの人材が、決定的に不足している。

この一年、様々な形で、被災地の創造型復興教育のお手伝いをしてきた。「創造型復興教育」とは、被災地の子どもたちの心のケアから始まり、さらには未来の地域再生を担う想像力と創造性を持った子どもたちを育てるために行われている多様な試みの総称だ。音楽・美術・演劇などのワークショップや、食育、防災・防犯教育など、双方向型、参加型の多彩なプログラムが展開されている。文科省もそのための予算を、まだまだ少ないながら用意している。

しかし、地元の反応は弱いと言わざるを得ない。たとえば「すでに予算も確保してあるから」と言っても、教育委員会から「大変ありがたいお話なのですが、いま学習課程が二週間も遅れているんです。ワークショップどころではないんです」といった返答がかえってくる。あの大震災に見舞われて、校舎を流され、残った学校も避難所となるような体験をしながら、二週間の遅れで止まっている教育関係者の努力にはたいへんな敬意を表したいが、問題の本質はそこにはないだろう。

いったい、その学習過程とは、誰のための教育なのか？　いや、それを定めた文科省でさえも、非常時であるから柔軟な対応をというメッセージを幾度も出しているの

だ。

今回の震災で、あらためて明らかになったことの一つは、いかに東北が東京の、あるいは京浜工業地帯の下支えになってきたかという事実だった。それは電力やサプライチェーンだけのことではない。東北は長く、東京に対して、中央政府に対して、主要な人材の供給源だった。日清日露の戦場ではまさに兵卒として、大正、昭和期には満蒙開拓の先兵として、戦後は集団就職、出稼ぎの発進基地として。

この人材供給のシステムは、学校教育レベルから始まっており、偏差値の序列に従って中央へ中央へと人材が吸い上げられる仕組みとなっている。岩手大学へ、東北大学へ、東京大学へ。進学は常に、上り列車に乗って進んでいく。

では、この三陸の復興は誰が担うのか？

まだ、この期に及んで、国家のための教育を続けるのか？

もちろん、東北にも、地域のための人材を育成する新たな試みも生まれてきている。

たとえば福島県いわき市のいわき総合高校は、総合高校であるメリットを最大限に生かし、ユニークなコースを多彩に準備して徹底した少人数教育を行っている。

駅伝で活躍した「山の神」柏原選手が在籍した「スポーツ健康系列」、東北で唯一の演劇コースを有する「芸術・表現系列」、フードコーディネートなどの授業を含む「生活・福祉系列」など。この高度できめ細かな教育システムを求めて、福島全県、あるいは他県からも受験者があると聞く。

司馬遼太郎氏は、すでに三十年前に、「南部一藩は、徳川幕藩体制に組み込まれなければ、デンマークのような酪農国家に

なる可能性を持っていたのではないか」と指摘している。江戸時代、本来南方由来の植物である稲は、まだ南部藩のような高緯度地方に適した作物ではなかった。しかし徳川幕藩体制の米本位制に組み込まれてしまったために、この藩は、常に凶作の恐怖におびえながらの生活を余儀なくされた。

かつて陸奥は、平泉にあのような金色堂を建てるほどの富と感性を持っていたはずなのだ。

東北人は決して、生まれながらに粘り強いのではない。富国強兵や高度経済成長を支える従順で根性のある人材、それはすなわち時の中央政府に都合のいい人材を供給するために、東北人は飼い慣らされてきてしまったのではなかったか。

宮沢賢治は、同じ『農民芸術概論綱要』のなかで、以下のようにも書いている。

曾つてわれらの師父たちは乏しいながら
可成楽しく生きてゐた
そこには芸術も宗教もあった
いまわれらにはただ労働が　生存があるばかりである
宗教は疲れて近代科学に置換され然も科学は冷く暗い

東北、被災地が真の自立を目指すならば、そこに暮らす住民一人ひとりが、「そのときどきの芸術家」となって感性を磨き、地域の付加価値を高めていく以外に近道はない。二つの三陸大津波の年に生まれ、そして死んでいった賢治の祈りが、いま、何よりも切実なものとなっている。